東京家政大学　学修・教育開発センター

CRED通信 14

クレッド

2021.9

「自主自律の学び」を研究・支援します。

01 本学の中期計画
中期計画の実質化

02 リサーチウィークス　令和2年度FDフォーラム
児童学科における
アセスメントプラン策定の試みについて

03 教職員研究会
令和2年度教職員研究会を振り返る

04 学生CRED
新入生ウェルカムパーティー

05 CRED COLUMN
共催によるFD（「ルーブリック研修」）／
FD研修会報告

06 CRED NEWS
活動記録　2020.04-2021.03

TOKYO KASEI UNIVERSITY

CRED TOPICS ×

本学の中期計画

中期計画の実質化

学修・教育開発センターの活動で感じていたこと

私は、学修・教育開発センター（CRED）発足の数年前から、当時あったFD委員会等の委員として活動していました。中教審答申等を読み共感するところも多く、学修者本位の大学への転換が必要であると感じていましたが、FD委員会の役割は、授業アンケートの実施、集計、報告、そのほかには授業公開の実施（参加者は多くありませんでした）くらいのものでした。そんななか、平成25年度から私立大学等改革総合支援事業が始まり、とくにタイプ1（「建学の精神を生かした大学教育の質向上」）はFDとの関りが強く、その設問内容は大学が取り組むべき方向性を示すものでした。FD委員会で対応することは難しく、当時の木元学長にご相談し、平成26（2014）年、学修・教育開発センター（CRED）の発足に至りました。CRED発足後ただちに大学IRコンソーシアムの共通調査に参加し、また、「自主自律の学びを研究・支援します」を標語としてCRED通信を創刊することなどから始めて、本学に必要だけれどFD委員会ではできなかった活動に取り組んできました。ただ、活動する中で、いくつかの「進めづらさ」も感じていました。

CREDは、本学でこれまで行っていなかった新たな取り組みを提案することが多かったため、ときに「CREDが勝手にやっている」といった反応もあり、大学が必要としない（大学の目標に合致しない）ことを行っているのではないかという気持ちに陥ることがありました。CREDにかぎらず、部署はそれぞれに事業計画を立て仕事をしていますが、大学全体の目標、進むべき方向性が教職員間、部署間で十分に共有されていないため、全学で結束するという意識を持ちにくいのを感じていました。

また、CRED立ち上げの直接のきっかけが私立大学等改革総合支援事業タイプ1への対応であったことは述べましたが、平成25年度における本学の得点は選定ラインに遠かったため、CREDの1年目、2年目は、タイプ1の得点をあげることを目標の一つとして取り組んだところがあります。平成27年度に、はじめてタイプ1で選定され、成果はあったのですが、タイプ1の要求は年々厳しくなり、その後は選定ラインに到達できずにいます。大学として取り組むべき課題、とくに、単独の部署での単発の対応ではなく全学的な中長期の視点を持って取り組まねば解決が難しい課題が増える傾向にあります。大学として優先順位付けを明確にしなければ、各部署は課題対応に追われるけれど、本来的な成果はあがりません。

中期計画に基づく大学運営を

私立学校法の改正により、令和2年度より私立学校においても中期計画を策定することが義務化されました。本学でも、「学校法人渡辺学園2020（令和2）～2024（令和6）年度中期計画」を策定し、大学・短大・大学院については、20の目標、47の計画を立てています。この目標、計画を全学で共有し具現化することによって、CREDで感じていた「進めづらさ」を解決していけるのではないかと考えているところです。

本年度の教職員研究会の基調講演講師をお願いした篠田道夫先生は、中期計画の意義を3つにまとめ示しています。

●大学が目指す基本方向を明確に指し示し、全学一致で共有すること
（教職員の間に大学運営に対する共通理

解ができる。法人と大学が共通の目標に向けて活動できる。）

●単発の改善ではなく、目標実現への総合的・系統的施策、年次計画
（年次的・計画的な事業の計画実施につながる（事業計画との一体化）。PDCAサイクルで経営・運営できる。教育改革や学生募集など長期的視点が必要な改善を推進できる。）

●重点を鮮明にし、そこに絞り込んだ事業展開を行うこと
（重点事業を設定し運営できる。大学の特色化や個性化を推進できる。）

もちろん、中期計画はただ策定すればよいわけではありません。令和2年度に策定された中期計画について、現状では以下の問題があると考えています。

●その内容が全学で共有されていない。

●計画が曖昧で、「誰が」「いつまでに」「何を」行うのかが不明確である。

●優先順位付けが曖昧である。

こうした問題に対処し、中期計画を実質化・具現化するために、今年度5月の全学運営会議で中期計画推進委員会を設置し、委員会には以下のことをお願いしています。

●47の中期計画について、誰が、いつまでに、何を行うのかを明示する。

●47の中期計画について、優先順位付けをする。

●各遂行責任者（部署、学科等）が、年次計画を具体的に策定できるようにする。

●各遂行責任者が、年度末に評価・改善を行えるようにする（PDCAが回るように）。

●47の中期計画、及び中長期目標・計画全体の見直し・点検を行う。

さらに、今後、各遂行責任者の計画と進捗を学内に公表し共有するとともに、社会への公表も視野に、今年度後期をかけて、中長期目標・計画を見直すことも予定しています。大学の進む方向・目標を全学で共有し、教職員、学部・学科、部署が手分けし、協同して、PDCAを回すことで、計画的に大学を発展させていきたいと考えています。

【参考文献】
篠田道夫　2009　中長期計画の実質化に向けて－目標を鮮明にした戦略経営こそが，大学の未来を切り拓く－　カレッジマネジメント, 156, 5-11.
篠田道夫　2020　大学改革の処方箋－中長期計画推進・教育改善・職員力向上－　東信堂

【参考サイト】
・CRED通信
https://www.tokyo-kasei.ac.jp/campus_support/cred/cred_news.html
・私立学校法（中期計画の策定義務化）
https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=324AC0000000270
第四十五条の二
・私立大学等改革総合支援事業
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shinkou/07021403/002/002/1340519.htm

Writer 井上 俊哉
Shunya Inoue
本学学長、心理カウンセリング学科教授（心理統計研究室）
平成3年本学着任/研究分野：教育心理学、心理統計学/著書：『メタ分析入門』（東京大学出版会）、『心理検査法入門』（福村出版）、『心理統計の技法』（福村出版）

リサーチウィークス　令和２年度ＦＤフォーラム

児童学科における アセスメントプラン策定の試みについて

令和２年度ＦＤフォーラムが令和３年２月17日に開催され、第Ⅱ部の活用事例報告において、児童学科におけるアセスメントプラン策定について発表しました。本記事では、発表に至る経緯と、現在の取り組みについて記します。

(1)発表に至るまでの経緯

令和２年12月12日、平山祐一郎先生から佐藤隆弘先生と私宛に、児童学科のディプロマ・ポリシー(以下DP)とGPS-Academicの対応付けについて検討したいとのご提案がありました。

ご提案の根本的な関心は、「児童学科・保育科の学修成果指標」(現在ver.12)を充実させて、学修成果を可視化するための仕組みをさらに強化するところにあります。これまでアンケートで測る間接評価について、その量的指標に関しては「達成度アンケート」を、質的指標に関しては「達成度アンケートの自由記述」を用いてきました。またテストで測る直接評価については、質的指標に関して「アセスメント科目」の設定と運用を、量的指標については「アセスメント・テスト(児童学科版DKS50)」の開発と運用を進めてきました。ただし新たに開発した「アセスメント・テスト」は、児童学科DP３本柱のうち、「知識・技能」を測定することに関しては妥当性が高いと思われる一方で、「思考力・判断力・表現力」および「主体性・多様性・協同性」を測ることには必ずしも馴染まないという弱点を抱えていました。逆に言えば、このDP３本柱の「思考力・判断力・表現力」および「主体性・多様性・協同性」を直接評価する量的指標さえ揃えることができれば、「学修成果指標」は一通り完成することになります。折良く、全学的にGPS-Academicの運用が開始されました。このGPS-Academicを、児童学科DPに対する学修成果指標として有効に活用することができないか、というアイデアが本提案の初発の関心となります。GPS-Academicは、Benesseのパンフレットによれば、「汎用的な能力の可視化」を目指して開発された指標で、具体的には「思考力」「姿勢・態度」「経験」を測定する指標であると謳われています。この測定指標が児童学科DPの目指す学修成果と噛み合っていなければ、児童学科のアセスメントとしては著しく妥当性を欠くことになります。そこで、GPS-Academicが児童学科DPの学修成果指標として妥当性があるかどうかを確認するために、DPとGPS-Academicの対応付けを具体的な項目に即して検討することにしました。

まず平山先生が作業用ファイルを作成し、それを元に鵜殿が叩き台を作成した後、12月14日に、平山先生・佐藤先生・鵜殿の３人でWebexにて検討を行ないました。具体的には、児童学科DPの学修成果９項目とGPS-Academicの測定指標15項目をクロスさせると、対応しているかどうかを検討すべきポイントが９×５＝135個できます。このうち半分ほどは議論するまでもなく対応しているかしていないかを判断できるのですが、判断が難しい対応については３人で具体的な事例を挙げて議論しながら検討を進めました。結論としては、FDフォーラムでご報告したとおり、十分に学修成果指標として活用することが可能だろうと判断しました。しかしより大きな成果となったのは、この対応付けを検討する過程で児童学科DPそのものの特質が浮き彫りになり、レジリエンスや批判的思考力などをDPで比較的軽視していたことが分かるなど、改めてDPを考え直す様々な気づきや視点を得たことかもしれません。

(2)現在と今後の課題

現在も学修成果指標の改善に取り組んでいます。直近の課題は、アセスメント科目のあり方の再検討です。現在は全学生が履修する科目をアセスメント科目として設定し、ルーブリックを用いて評価を行なう体制になっていますが、担当教員にだけ負担が偏るなど、実際の運用に際して様々な問題があることが分かってきました。ルーブ

リックを用いるか評定尺度法で行なうか、また評価のターゲットをどこに絞るかなど、これまでの運用実績を踏まえて、実際的に考える段階に入ってきています。

また短期的には、アセスメント・テストの改良と活用方法の検討が重要な課題になっています。テストをやりっぱなしにするのではなく、結果を様々な指標と組合せながら分析することで、学生の指導やDPの改善に活用していく段階に進んでいければと構想しています。

中長期的には、ICTも活用しながら、ポートフォリオとの紐付けや、学生へのフィードバック等を考えていく段階に差し掛かっているように思います。様々な評価指標をバラバラに運用するのではなく、学生個人個人の学びの履歴＝ポートフォリオに総合的・統一的に落とし込み、学生自身がこれからの学びに役立てられるような仕組みを構想してよいように思います。GPAだけでは見えてこない学生の特性や持ち味を可視化する仕組みを整えることで、学生が自らの学びやキャリアのあり方について自覚する材料にするだけでなく、教員の方の指導もより効果的になることを期待します。

Writer 鵜殿 篤
Atsushi Udono
本学短期大学部保育科准教授、学修・教育開発委員。
文教学院大学を経て、平成29年本学着任／研究分野：教育学／
担当科目：教育課程論、教育制度論、ゼミナール㈱、自校・初年度教育科目（保育）、他

教職員研究会

令和２年度教職員研究会を振り返る

令和2年度の教職員研究会のテーマは、昨年に続き「東京家政大学の自己点検・評価を考える」でした。「東京家政大学の内部質保証を考える」をテーマとした平成29・30年度を含め、4年間一貫したテーマに取り組んでいます。

令和2年度は、Covid-19の影響により例年実施している7月の第一部基調講演は中止としました。9月の第二部では、事前にオンデマンドで井上俊哉副学長（当時）による「自己点検と内部質保証」についての説明を本学教職員に向け配信しました。そして、第二部当日は、Web会議システムを使用しリアルタイム形式で「教員の部」「職員の部」の研修をそれぞれ実施しました。

教員の部は「東京家政大学の自己点検・評価・・・大学基準４（教育課程・学習成果）の取り組みについて」をテーマに、令和2年度の自己点検・評価活動について、事前に提出していただいた自己点検・評価ワークシートをもとに各学科・科から中間報告を行い、質疑応答・意見交換を実施しました。家政学部・短期大学部のグループと、人文学部・健康科学部・子ども学部のグループに分かれ実施し、各グループとも活発な意見が交わされました。

職員の部では、明治大学の山本幸一氏を講師に迎え、「データ活用による大学評価（アセスメント）と教学政策の推進」をテーマに、お話しいただきました。他大学のIRを基に継続的な点検・評価を行っている先行事例を伺える貴重な機会となりました。

令和２年度の教職員研究会は、Covid-19に係る様々な対応で、主催者側および参加者側ともに準備に十分な時間をあてられないなかでの実施となりました。それでも参加者の発言やアンケートの回答からは、教職員の熱心な姿を受け取ることができ、自己点検・評価の考えが教職員の間に根付いてきたとのだと考えています。

Writer 丸山 毅
Takeshi Maruyama
学修・教育開発センター

新入生ウェルカムオンライン会 in板橋キャンパス

PROGRAM

4/15 THU
- 15：50 ・児童学科（児童学専攻／育児支援専攻） ・栄養学科（栄養学専攻／管理栄養士専攻） ・児童教育学科 ・環境教育学科 ・服飾美術学科
- 17：00 ・造形表現学科 ・英語コミュニケーション学科 ・心理カウンセリング学科 ・教育福祉学科 ・保育科（短期大学部） ・栄養科（短期大学部）

4/16 FRI
- 15：50 ・栄養学科（栄養学専攻／管理栄養士専攻）

2021春

新入生ウェルカムパーティー

柴　亜紀子
人文学部 教育福祉学科3年

DATA 2021年4月15日（木）15：50～18：00／4月16日（金）15：50～16：50
学生270名（上級生35名　新入生235名）、教員2名、職員3名

学生CREDでは、毎年4月に“新入生と上級生が交流するイベント”である新入生ウェルカムパーティーを開催してきました。

しかし、昨年は感染症拡大防止の観点から新入生ウェルカムパーティーを開催することが出来ませんでした。昨年も長い時間をかけて準備していたため、中止になってしまったことはとても悔しかったです。

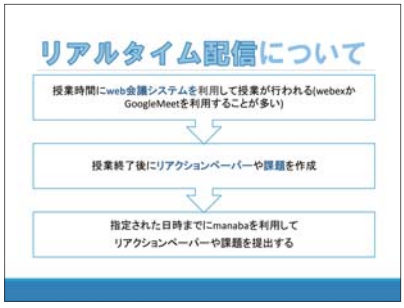
そして、今年こそは新入生と上級生の交流の場を設けたいという思いから、今年の新入生ウェルカムパーティーはGoogleMeetを使用したオンラインでの開催を目指し、企画を始めました。また、オンラインでの開催にあたって、「新入生ウェルカムパーティー」という名称から「新入生ウェルカムオンライン会」という名称に変更しました。

本イベントは、12月頃から準備を始めました。そして、新入生が履修登録についての相談も出来るように履修登録前の日程でのイベント開催を目指しました。学生CRED史上初めてのオンラインでのイベント開催ということもあり、戸惑う場面も多くありましたが、学生CREDメンバーで協力し合いながら準備を進めました。GoogleMeetの使用方法について参加者全員が理解出来るようにマニュアルを作成して、GoogleMeetの練習日を設けるなどオンライン開催だからこそ必要な準備も多くありました。

当日は、学科ごとにミーティングを設定して、学科ごとに分かれてイベントを開催しました。イベントの前半では、有志の学生CREDとは別に募集した上級生スタッフに事前に用意して頂いた資料を用いて、「1年次の履修や私生活について」「新入生へのアドバイス」「オンライン授業を受講する上でのポイント」などについて新入生に発表してもらいました。全ての上級生スタッフが非常に丁寧に資料の作成、学校生活についての説明をしてくれました。そして、イベントの後半では少人数のミーティングを設定して、新入生の質問に上級生が答えていくという時間にしました。後半の時間では、どの学科も活発な話し合いをすることが出来ました。

会の参加者に回答して頂いたアンケートでは、「先輩と話せる機会があり、良かった。」「参加することで他の新入生の状況も分かって良かった。」という声を頂くことが出来て、とても嬉しく思っています。

新入生ウェルカムオンライン会は、多くの方々の協力があり、開催することが出来ました。ご協力頂いた有志の上級生スタッフの方々、参加して頂いた新入生の方々、CRED教職員の皆様に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



共催によるFD（「ルーブリック研修」）

家政学部 造形表現学科　大木 敦子

ルーブリック評価の先にあるもの

本研修は芝浦工業大学教育イノベーション推進センターの榊原暢久先生を講師に迎えて開催された。ワークショップに際し実際の授業の到達目標をベースに組み立てたことで実践的であり、ルーブリック自体の有用性とともに自身の授業デザインの中にある矛盾にも気づくことができた。

造形表現学科の実習科目ではテスト以外の（定量的評価ではない）評価をしてきたと言えるが、「知識・技能」以外の部分では言語化できなかったものが多かった。その点はルーブリックを用いることで教員が成績評価の基準とする指標を学生に学生に明示できる。また学生自身が自己の理解度・習熟度またそのプロセスを客観的に評価する方法としても提供できる。

しかしながらそこに示されているものが全ての答えではなく、学生が自ら考え学んでいく姿勢を奪いかねない懸念もある。それを避けるためには、ルーブリックの枠に留まらない能力や価値があることを示すことが必要と考える。

今回のグループワーク内で「独創性」というキーワードが上がった。個人的には独創性は段階的評価ではなく、有るか無いかの２択だと思うが、そういう視点（評価観点）もあることを示すことが重要であるとの講師からの言葉が印象的だった。

ワークショップ内で作成したルーブリックには高評価の欄に「独創性がある」と言う一文を加えたが、表の外側に置いておき、低評価だとしても独創性があるものにはプラス評価を付けるなどの工夫もできる。これは造形表現学科の作品制作の実習授業の場合だけでなく、レポート課題や他の授業にも生かせるポイントではないだろうか。

これまでルーブリックを授業で取り入れつつもその評価には限界があると感じていたが、その評価が全てではないこと、その先にある「価値」の創造を目指して学習に取り組んでほしいことを学生にどれだけ伝えられるかが鍵であると感じた。

技術的なことを申し添えるならルーブリックに用いられているマトリクス形式の表がmanaba上に反映でき、集計まで可能になるとさらに授業内での汎用性が上がると感じた。

FD研修会報告

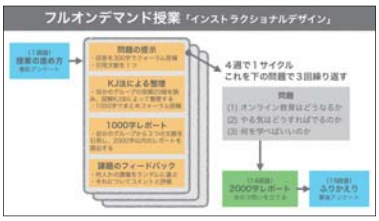
家政学部 児童学科　佐藤 隆弘

インストラクショナルデザインの考え方を活かしたメディア授業の設計

４月22日、早稲田大学人間科学学術院の向後千春先生を講師にお招きして「インストラクショナルデザインの考え方を生かしたメディア授業の設計」と題した研修会が開催された。講演では向後先生ご自身のオンライン授業の工夫について、授業の規模ごとにお話しいただいた。

大規模授業の例は、LMSを活用して、学生間で情報共有と協働作業をさせるオンデマンド型授業であった。課題提示中心の授業にもかかわらず、オンライン授業に対する受講者のイメージが向上したというアンケート結果は興味深く、オンデマンド授業による協働学習の可能性を感じた。

中規模授業の例としては、リアルタイムオンラインとオンデマンド（課題提示）の併用型授業をご紹介いただいた。Zoomによるレクチャーの際には、他の講師と掛け合いをしながら授業を進める工夫がなされていた。またこのレクチャーでは時間が合う学生がリアルタイムで出席し、出席できない学生は録画映像を視聴する方法が取られていた。複数教員がオンラインで同時参加できる授業は限られると思うが、対話場面にすることで、講師一人では単調になりやすいオンライン講義に変化をつけられると感じた。また、本学では対面授業とメディア授業を併存させた都合上、原則として対面授業の前後の時間にリアルタイムオンライン授業は実施できないが、この例のように録画配信を併用すればリアルタイムオンライン授業を増やせる可能性もあると考えた。



ゼミナール等の小規模型授業の例は、Zoomを用いたオンライン授業であった。オンラインでゼミを行うことには学生の教え合いが起きにくいという欠点があるが、録画映像を学生が再確認できるなどの利点もあるということであった。

講演後には活発な質疑応答が行われ、いくつもの参考になる情報が得られた。私を含め、現在もメディア授業を手探りで行っている先生は多いと思われる。そのような状況で行われた今回の研修は、メディア授業の導入・改善の上で大いに参考になるものであった。

活動記録 2020.04-2021.03

学修・教育開発委員会

2020年4月8日
第1回委員会(メール回議)(令和2年度授業アンケートの実施等)
2020年5月13日
第2回委員会(メール回議)(第1回議事録承認)
2020年6月10日
第3回委員会(メール回議)(令和2件度FD研修等)
2020年7月8日
第4回委員会(メール回議)(第3回議事録承認)
2020年9月9日
第5回委員会(WEB会議)(グローバル教育センターとの共催FDイベント等)
2020年10月14日
第6回委員会(WEB会議)(令和2年度「授業を通してみた学修達成度アンケート」等)
2020年11月11日
第7回委員会(メール回議)(各学科・科のFD研修等)
2020年12月9日
第8回委員会(WEB会議)(令和3年度教育改革推進事業(学長裁量)等)
2021年1月13日
第9回委員会(WEB会議)(令和3年度シラバス入力項目・シラバス第三者チェック等)
2021年2月10日
第10回委員会(WEB会議)(リサーチウィークスFDフォーラム等)
2021年3月10日
第11回委員会(メール回議)(令和2年度後期授業アンケート結果報告等)

学修・教育開発センター会議

2020年6月12日
第1回センター会議(WEB会議)(令和2年度教職員研究会等)
2020年6月19日
第2回センター会議(WEB会議)(令和2年度教職員研究会等)
2020年6月26日
第3回センター会議(WEB会議)(令和2年度教職員研究会等)
2020年7月17日
第4回センター会議(WEB会議)(IR情報等)
2020年10月16日
第5回センター会議(WEB会議)(ディプロマサプリメントシステムの導入等)
2020年11月13日
第6回センター会議(WEB会議)(令和2年度リサーチウィークス等)
2020年12月7日
第7回センター会議(WEB会議)(リサーチウィークスFDフォーラム等)
2021年1月14日
第8回センター会議(WEB会議)(令和3年度シラバス入力項目・シラバス第三者チェック等)
2021年2月8日
第9回センター会議(WEB会議)(令和3年度FD計画等)

※括弧内は主な検討事項

行事

2020年4月1日
CREDレターNo.19(発行)
2020年6月11日
スタートアップセミナー自主自律　広報誌vol.1(発行)
2020年7月2日
スタートアップセミナー自主自律　広報誌vol.2(発行)
2020年7月16日
スタートアップセミナー自主自律　広報誌vol.3(発行)
2020年7月29日
GPS-Academic　教職員向け報告会(板橋キャンパス)
2020年8月6日
スタートアップセミナー自主自立広報誌vol.4(発行)
2020年8月6日
GPS-Academic　教員向け報告会(狭山キャンパス)
2020年8月27日
スタートアップセミナー自主自律　広報誌vol.5(発行)
2020年9月4日
CRED通信No.13(発行)
2020年9月11日
令和2年度教職員研究会　第二部(企画・運営)
2020年9月17日
スタートアップセミナー自主自律　広報誌vol.6(発行)
2020年10月16日
CRED通信増刊号(発行)
2020年10月29日
スタートアップセミナー自主自律　広報誌vol.7(発行)
2020年10月31日
CREDレターNo.20(発行)
2020年11月7日
共催によるFDイベント「連続セミナー共通語としての英語—実践と可能性—第3回ワークショップELFについて学んだ日本人学生の意識はどのように変化する(しない)のか?」(共催)
2020年11月19日
スタートアップセミナー自主自律立広報誌vol.8(発行)
2020年11月27日～2021年1月31日
第1回教育改革推進(学長裁量)経費予算による研究・開発シリーズ「e-learningに関する研修会」(オンデマンド)(企画・実施)
2020年12月1日
令和元年度 教育改革推進(学長裁量)経費予算による研究・開発の成果報告書(発行)
2021年2月1日
CREDレターNo.21(発行)
2021年2月15日～3月9日
リサーチウィークス(実施)
2021年2月15日
リサーチウィークスオープニングレクチャー(企画・運営)
2021年2月17日
リサーチウィークスFDフォーラム(企画・運営)
2021年2月22日～3月9日
リサーチウィークス教育改革推進(学長裁量)経費予算による研究・開発の報告(オンデマンド)
2021年2月24日～3月19日
共催によるイベント「障害の理解と対応」に関する講習会(オンデマンド)(共催)
2021年2月25日、3月5日
自校教育科目「スタートアップセミナー自主自律」担当教員研修(企画・運営)
2021年2月26日
協同学修(アクティブラーニング研修)(企画運営)
2021年3月1日～4月30日
第2回教育改革推進(学長裁量)経費予算による研究・開発シリーズ「双方向学修課題の開発」(オンデマンド)(企画・実施)
2021年3月10日
共催によるFDイベント「ルーブリック評価入門WS」(共催)
2021年3月23日
自校教育科目「スタートアップセミナー自主自律」SA・教員研修(企画・運営)

出張歴・外部研修(オンライン参加含む)

2020年8月7日
IRer養成講座(初級編)@オンライン:宮東城
2020年9月17日
教育の質保証実践セミナー@オンライン:丸山毅、宮東城
2020年10月25日
大学コンソーシアム京都 2020年度 第18回 SDフォーラム@オンライン:安積和広
2020年11月13日
GPS-Academic活用オンライン研究会@オンライン:宮東城
2020年11月19日
大学IR実践セミナー2020@オンライン:丸山毅、宮東城
2020年11月28日
2020年度「初年次教育実践交流会 in 北陸」@オンライン:矢野穂
2020年12月1日
第7回Tableau大学ユーザー会@オンライン:宮東城
2020年12月10日
ラーニング・アドバイザー養成講座2020@オンライン:矢野穂
2020年12月15日
「大学等の職員がおさえておくべき広報の基礎」セミナー@オンライン:矢野穂
2021年2月24日
ニューノーマル時代における「教育現場のDX」@オンライン:安積和広
2021年3月12日
教学における内部質保証のためのPDCAサイクル研修@オンライン:宮東城
2021年3月24日
GPS-Academic分析・活用キックオフセミナー@オンライン:宮東城

新規&追加購入文献

- 「これからの大学」松村圭一郎、春秋社
- 「大学教授が、「研究だけ」していると思ったら、大間違いだ!」斎藤 恭一、イースト・プレス
- 「「深い学び」の科学」北尾倫彦、図書文化
- 「学びの羅針盤:ラーニングアナリティクス」古川雅子、山地一禎、緒方広明、木實新一、財部恵子(著)、丸善出版
- 「「教えて考えさせる授業」を創る」市川伸一、図書文化
- 「「逆向き設計」実践ガイドブック」奥村好美、西岡加名恵(編著)、日本標準
- 「大学生学びのハンドブック」世界思想社編集部、世界思想社

2020年度、CREDは以下のメンバーで活動しました ※各役職は、2021年3月時点

所長	井上俊哉(心理カウンセリング学科)
副所長	平山祐一郎(児童学科)
参事	走井洋一(児童教育学科)
	大西淳之(栄養学科)
	宮本康司(環境教育学科)
	佐藤隆弘(児童学科)
センター専任職員	丸山毅／宮東城／安積和広／矢野穂
センター嘱託職員	山本優子
センター業務補助員	佐藤初心／大西遥

2021年9月発行　編集 / 発行:東京家政大学 東京家政大学短期大学部　学修・教育開発センター
〒173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1　TEL:03-3961-0284　E-mail:cred@tokyo-kasei.ac.jp